

2024年3月17日（大斎節第5主日、B年）

牧師メッセージ

「神の素晴らしさ」

（ヨハネによる福音書12：20-33）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音は、ギリシア人が主イエスに会いたいと願ひ、訪れるところから始まります。異邦人であるギリシア人たちの訪れは、いよいよ全ての民に福音が成就する、その時が近づいていることを暗示しています。そして、この時にあつて、主イエスは言われました。「わたしはまさにこの時のために来たのだ。」「この時」とは十字架の時を示していますが、今日の福音書によればそれは同時に「御名の栄光が現される時」です。御名の栄光とは、神の栄光のことに他なりません。では、神の栄光とは何でしょうか。以前、ある冊子を読んでいたら、たまたま「栄光（素晴らしさ）」という記述を見つけました。ストーンと腹に落ちた気がしました。神の素晴らしさを現すために主イエスはこの世に来られたのだ！と。

ならば、神の素晴らしさとは何でしょうか。わたしたちはすでに、信仰の歩みなかで神の素晴らしさをたくさん感じているはずです。今日の主日、まずはそれぞれが神の素晴らしさに触れた時を振り返り、感じたいと思います。その上で、あえて神の栄光、神の素晴らしさをご復活の出来事から述べるのなら、神は常に「その先」に希望を用意してくださっている、ということです。それこそが御子の受肉、そして十字架と復活によって示された、「神の素晴らしさ」です。主イエスの十字架上の死は人間の目から見れば、完全なる敗北、悲惨なものでしかありません。しかし、死の「その先」に神はご復活の希望を用意していました。神は立ち直ることなど不可能だ、絶望だと思われるような現実の先に、希望を用意してくださっている。神の栄光、神の素晴らしさはここにあります。主イエスはこの神の素晴らしさ、「その先の希望」をわたしたちに示し、与えるために、十字架に登られました。その先に用意されていた復活の喜びに照らされる時、十字架の時が神の素晴らしさ、御名の栄光が現された「その時」であったことが分かります。